

■ 巻 頭 言 ■

38年間の千葉県の環境職員として

千葉県環境研究センター センター長 小 川 功



自己紹介になりますが、昭和44年に県の公害研究所(現在の千葉県環境研究センターの大気部)に採用され、大気規制立入業務とそれに関わる調査研究を6年の間研究員として勤務してきました。それ以来、本庁環境行政の職員として大気、水質、産業廃棄物などの行政施策の推進に寄与する仕事に30年間にわたり携わってきましたが、定年まで2年を残しての平成17年4月に、当初22歳で採用された場所に戻ってきて定年を迎えられる喜びを感じています。

千葉県の環境行政は日本の中でも早い時期から取り組まれてきていますし、その真っただ中で仕事をしてきたことが誇りでもあります。その間何をしてきたのだろう、そして何が変わってきたのだろう、千葉県の環境や自然にそのことはどう関わってきたのだろうと、この機会に少し振り返ってみました。

千葉県での公害問題は初期(昭和40年代後半)は大気汚染でした。臨海部に京葉工業地帯が動き出し、硫黄分の多い液体燃料の使用による硫酸化物の影響が直接的に千葉特産の梨や米に影響を及ぼしていました。そのことについては県・市・企業の努力で徐々に解決してきましたが、印旛沼・手賀沼の汚染や東京湾の汚濁問題については事情が違ってきます。当時は規制行政が主体の公害対策の中で、発生源の主体は企業でしたが、今は環境問題の加害者が企業から市民・県民になってきているのです。加害者という言い方はおかしいのでしょうか原因は私たちなのです。大気の問題は自動車が主流です。騒音問題も、工場の影響は少なく、道路や鉄道や航空機といった我々が利用しているながらの影響が出てきているのです。水質にしても規制行政の成果から、発生源の主流は規制の及ぶにくい生活系・自然系が汚濁源の多くを占めるようになってきているのが現状です。

千葉県では昭和60年代前半から首都圏の不法な金儲けに走る人たちのゴミ捨て場と化し、不法投棄のメッカとして有名になり、そういったものを

監視する組織の立ち上げにも携わっていました。

こんな中でこれまで規制行政に慣れすぎてきた環境の仕事は、原点に戻らなければいけなくなっているように感じています。その原点とは、次世代を担う若者や住民の方々に対する環境教育や学習といった施策の充実だと思っています。ただ、これらの社会への浸透や効果が現れるまでには期間がかかることから、目の前での緊急的な対応を求めるのが好まれる今の環境行政の中では、これら環境教育や学習は軽く見られがちです。先を見ての環境行政を重視するべきではないでしょうか。

さらには、公害華やかなりし頃、大量に採用された職員が団塊の世代という状況の中で辞めていくことになるのですが、千葉県ではその世代の後の採用者が少ないことから、どうしても後継者不足が大きな問題として出てきています。行政に限らず、どんな組織でも後継者の確保は絶対必要ですが、研究機関でも必要だと声を大きくして言っても返ってくる返事は小さな声でしか戻ってきません。職員の定年で研究テーマも定年になり、使ってきた機材までも老朽化で定年となり研究テーマは消滅してしまうのです。そのことが将来の環境を救う手がかりを一つまた一つと消していくんだということに気が付かなければなりません。

ある時期に「白虎」というペンネームで民間の新聞に言いたい放題で随想を掲載させていただいたことは、当時環境への思いをぶちまける場を得て自分への良い励みになったものです。

38年間という千葉県職員としての環境への数多くの関わりをこれからの若い職員に委ね、一民間人となって県行政を応援していくことができれば幸いです。

「少なくとも千葉県の環境技術の基本は環境研究センターに聞けばすべて分かるくらいの組織になっている」と自負しつつ卒業したいと想っている今日この頃です。